

見ても読んでも楽しい！



(部分)

歌川芳幾画

「東海道中栗毛弥次馬 草津・大津」

(草津市蔵・中神コレクション)

江戸時代の草津を描いた浮世絵には、矢倉立場(たてば)にあった草津名物、姥ヶ餅(うばがもち)を売り出していた「うばがもちや」を描いたものが多くあります。今回は、それらの中でも弥次(弥二)さん北(喜多)さんが登場する「東海道中栗毛弥次馬」について紹介します。

「東海道中栗毛弥次馬」は、江戸時代後期にベストセラーとなった十返舎一九(じっぺんしゃいっく)の「東海道中膝栗毛(ひざくりげ)」を、戯作家・仮名書魯文(かながきろぶん)が東海道五十三次の宿場に伝わる風俗や伝説をもとにエピソードを加えて脚色し、浮世絵師・歌川芳幾(うたがわよしいく)が絵を添えています。万延元年(1860)に出版されたこの作品は、絵が二丁ずつ1枚に摺られ30枚あり、草津は大津と併せて1組になっています。

このシリーズでは、弥次さん北さんによる滑稽な会話と狂歌が主に平仮名で記され、仕草や表情の豊かな登場人物たちが面白おかしく描かれています。草津の内容は、うばがもちやの店先で弥次さんが姥ヶ餅を慌てて食べたために喉に詰まらせ、せっかくの餅を吐き出しています。5つ食べたという弥次さんでしたが、口から吐き出したのは全部で7つ。背中を叩く北さんと店のお婆さんは、サバを読んで横着なことをする弥次さんに呆れかえっています。左下には「すきはらにあはててのどへからみもち はらのたしにはならぬくるしさ(すき腹にあわてて喉へからみ餅 腹の足しにはならぬ苦しき)」とこの場面にあった絶妙な狂歌とともに、この様子を笑う犬が可愛らしく描かれ、現在の私たちも楽しめる作品となっています。

(令和4年11月・草津宿本陣 松本 真実)